

風流論

——万葉集における古風と今風——

一 はじめに

風流が文化価値的な論議として登場するのは万葉集においてである。その早期の段階は「東鄰の貧女」に扮した石川女郎と、容姿佳艶で「風流秀絶」の相伴田主との諷刺による風流および風流士（遊士）についての応酬であるが、このような風流論議が恋の駆け引きとして現れるのは、風流への知識が一つの段階を迎えたことを示唆している。万葉集には、この他にも次のような風流が見られる。

(1) 献天皇歌一首 大伴坂上郎女、在佐保宅作也

足引乃 山二四居者 風流無三 吾為類和射乎 害

目賜名（巻四・七二一）

(2) 遊松浦河序

余以暫往松浦之県逍遙、聊臨玉鳴之潭遊覽、忽值釣魚

辰 巳 正 明

女子等也。花容無雙、光儀無匹。開柳葉於眉中、発桃花於頬上。意気凌雲、風流絶世。僕問曰、誰郷誰家兒等。若疑神仙者乎。「以下省略」（巻五・八五三前）

(3) 冬十二月十二日、歌儂所之諸王臣子等、集葛井連広成家、宴歌二首。

比来古儂盛興、古歳漸晚。理宜共尽古情、同唱古歌。故、擬此趣、輒献古曲二節。風流意気之士、儂有此集之中、争発念心々和古体。（巻六・一〇一一、一〇一二序）

(4) 春二月、諸大夫等集左少弁巨勢宿奈鷹朝臣家宴歌一首

海原之 遠渡乎 遊士之 遊乎将見登 莫津左比曾来之（巻六・一〇一六）

右一首、書白紙懸着屋壁也。題云蓬萊仙媛所化囊纒、

為風流秀才之士矣。斯凡客不所望見哉。

(5)無題

安積山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国 (卷一)

六・三八〇七)

右歌、伝云葛城王遣于陸奥国之時、国司祀承緩意異甚。於時王意不悅、怒色顯面。雖設飲饌、不肯宴樂。於是前采女、風流娘子。左手捧觴、右手持水、擊之王膝、而詠此歌。余乃王意解悅、樂飲終日。

(1)は山居していることから風流が無いのだというように、風流は都市に生じた風雅を指しており、風流が《みやび》であるのはそのことによる。(2)は松浦の仙女の様子であり、神仙の女との交情が主題化され六朝・唐代の傾向を示す。

(3)は古儻・古歳・古情・古曲・古体をもつて遊ぶことが風流だという、古風への憧れや尊重が見られる。(4)は紙に題された内容に、蓬萊の仙媛の化した蘊が風流秀才の為のもの、凡客のものではないのだというものであり、仙界に遊ぶことが憧れとして見られる。(5)は(1)とは反対に田舎に前の采女がいて風流の娘子と呼ばれている。都の風流が鄙へと流浪している姿を示すものである。これらから見れば、風流は都市の風雅であり(1)(5)、仙界と係わる者であり(2)(4)、古体への憧れ(3)である。これに先の石川女郎と田主の風流が加わるのである。

もとより、風流の語は次に示す諸橋徹次著の『大漢和辞典』を見ても知られるように、多くの意味と歴史的・文化的価値を内在する漢語であり、また、深津胤房氏は「誰それ振りの受け伝え」が風流の意味であり、それぞれ源となる名士があつたという^②。万葉集が受容するいくつかの風流は、そうしたある段階の中国文化の理解に基づいていることは明らかであろう。その断片が万葉集の風流を形成するのであるが、それは万葉集に留まらず日本文学の重要な文芸性を担う言葉ともなるのである^③。

この風流という漢語について、便宜上、諸橋徹次著の『大漢和辞典』によれば、次のように説明されている。

①なごり。遺風。余流。遺沢。美風のなごり。流風余韻。「漢書、趙充国伝贊」秦詩曰、王子興我甲兵、与子偕行、其風声氣俗、自古而然、今之歌謡、慷慨風流、猶存耳。「後漢書、王暢伝」士女仰教化、矜首仰風流。「魏志、高貴郷公紀評」高貴公才慧夙成、好問尚辭、蓋亦文帝風流也。「嵇康、琴賦」体制風流、莫不相襲。「北史、李彪伝」金不可滅、而風流不泯者、其惟載籍乎。②みやびやかなこと。品格の優雅なこと。又、俗事をすてて高尚な遊びをすること。洒落で世俗のことを超脱してゐること。風雅。「蜀史、劉惔伝」先生以其宗姓、有風流、善談論、厚親待之。「西京雜記、一二

文君十七而寡、為人放誕風流、故悅長卿之才而越体焉。
〔晉書、樂広伝〕 広与王衍俱宅心事外、名重於時、故天下言風流者、以王樂為稱首焉。〔世說新語、品藻〕 韓康伯門庭蕭寂、居然有名士風流。〔袁宏、三国名臣序讚〕 標榜風流、遠朋管樂。〔庾信、枯樹賦〕 殷仲文、風流儒雅、海内知名。〔徐陵、玉体新詠序〕 閱詩敦礼、非直東鄰之自媒、婉約風流、無異西施之教。〔南史、張緒伝〕 此柳風流可愛、似張緒当年。〔花蕊夫人、宮詞〕 年初十五最風流。③ おもむき。韻味。〔司空図、詩品〕 不著一字、尽得風流。④ 礼法に拘はらず自ら一派を為し、以て衆に異なること。〔晉書、王猷之伝〕 王猷之高邁不羈、風流為一時冠。〔唐書、杜如晦伝〕 如晦英爽自喜、以風流自命。

風流の主要な意味はここにあり、その用例からも早くは漢魏に見られ、六朝唐以降に展開することが知られる。また、風流に基づく熟語例として石川女郎と田主に見える「風流士」も「学問があつて詩や文章を愛し、俗でない人みやびやかな人。」「大漢和辞典」同上)の意で、その用例として「晋書、衛玠伝」丞相王導教曰、衛洗馬明当改葬、此君風流名士、海内所瞻、可修薄祭以敦旧好。「晋書、殷浩伝」王夷甫先朝風流士也、然吾薄其立名非真、而始終莫取。」を挙げてゐる。

この風流という漢語がある経路をたどり万葉集に受容され、万葉集の新たな表現世界が成立するのであるが、漢語としての風流の意味が右の如く一律ではないように、万葉集の受け入れた風流も一律ではない。ここでは、二つの作品をめぐって万葉集の風流がどのような位相の中に現れてくるのか考えたい。

二 風流論争

先の石川女郎と大伴田主との諠戯による風流論は、女郎が自媒によつて風流秀絶な田主と通じようとして田主のもとに貧女に変装して出掛けるということから始まる。その内容は次のように伝えられている。

遊士跡 吾者聞流乎 屋戸不借 吾乎還利 於曾能風流士(卷二・一二六)

大伴田主字曰仲郎。容姿佳艶風流秀絶。見人聞者靡不歎息也。時有石川女郎。自成雙栖之感、恒悲獨守難、意欲寄書未逢良信。爰作方便而似賤媼己提搗而到寢側、啞音躑足叩戸諂曰、東隣貧女、將取火来矣。於是仲郎暗裏非識冒隱之形。慮外不堪拘接之計。任念取火、就路歸去也。明後、女郎既恥自媒之可愧、復恨心契之弗果。因作斯歌以贈諠戲焉。

大伴宿祢田主報贈歌一首

遊士余 吾者有家里 屋戸不借 令還吾曹 風流士者
有(同・一二七)

同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之 耳余好似 葦若末乃 足痛吾勢 勤多扶倍思
(同・一二八)

右依中郎足疾、贈此歌問訊也。

これが全体の内容であるが、女郎の更に贈る歌を除いてこの作品の中心的主題は、そのいずれが《風流》であるかに就いての、言わば風流論争にある。容姿佳艶で風流秀絶と世間的評判の高い田主に対して、石川女郎は別の風流を以て田主に挑むのである。そのことを通して当時の人々の関心を集めたのであり、ここに風流が一義的ではなく多義的に理解されつつあった背景が示唆されている。

この作品が物語性を持つことは諸説に説かれるところであり、田主のそれは「伴氏系図」に「母巨勢朝臣女。容姿佳麗。見人靡不歎息。天下無双美男。見之女多恋死⁴」といひ、また石川女郎という名前も万葉集には頻出し、固有名詞的であるよりも恋愛物語を構成する上での普通名詞的役割を果たしていると思われ、そのことも従来より指摘されて来た⁵。ただ、この物語にはある意図が示唆されているのであり、それを示唆しているのが「東隣貧女」である。す

で小島憲之氏は司馬相如「美人賦」、梁の江淹「麗色賦」、初唐の沈佺期「搜玉小集、夜遊」および「玉体新詠」などに見られる東隣の美女を挙げているように⁶、東隣の貧女は東隣の美女の諷刺による翻訳であろう。また、小島氏は『文選』情賦に載る「登徒子好色賦」を特に注目し(同上書)、これを受けて蔵中進氏は石川女郎・大伴田主がこれらから翻案・脚色されているのだと指摘している。さらにまた、呉哲男氏はむしろ好色風流の原型としてよく知られていたものに『史記』列伝に見える、馭け落ちして結ばれた司馬相如と卓文君とのエピソードに注目する。特に呉氏は『西京雜記』(卷二)の「文君姣好、眉色如望遠山。臉際常若芙蓉、肌膚柔滑如脂。十七而寡、為人放誕風流」を引いて、石川女郎は「好色風流」の名士たる卓文君を気取り田主に一夜の宿を借りようとしたのだと説くのである⁸。

この女郎と田主の作品についてさらに『孟子』『遊仙窟』なども含めて、その出典は明らかにされているが、この作品の重要な主題が女郎と田主とによる《風流》をめぐる論争にあることである。もちろん、これが歌による贈答であるから論争とまでは言えないのだが、しかし、この二人の風流に関しての落差は大きいものであり、その落差の大きさがここでの風流論を際立たせていることも事実である。それを理解すればこの二人の風流論の背後には、新たに

《風流》というものがいかなるものかを論じる風潮が生じ、それをこのような諷刺を通して風流論を展開したのだと考えられるのである。もし、そのようであれば、これは石川女郎の好色性を中心に置かれるべきではなく、田主の風流との相違の問題として等値に扱われるべき問題である。

この風流の論争を好色を交えて展開されたのは、まさしく先の宋玉による「登徒子好色賦」である。これは登徒子という男から好色だと言われた宋玉がそれを否定して、むしろ登徒子の方が好色であるという論陣を張った、いわば好色論争というべき内容である。その主要な内容は次のように語られている。

①大夫登徒子侍於楚王短宋玉曰、玉為人体貌閑麗口多微辭又性好色。願王勿与出入後宮。

②王以登徒子之言問宋玉。玉曰、体貌閑麗受於天也。口多微辭所學於師也。於好色臣無有也。

③王曰、子不好色、亦說乎。有說則止、無說則退。

④玉曰、天下之佳人莫若楚國。楚國之麗者莫若臣里。

臣里之美者莫若臣東家子。東家之增一分則太長。減一分則太短。著粉則太白。施朱則太赤。眉如翠羽、肌如白雪。腰如束素、齒如貝。嫣然一笑惑陽城迷下蔡。然此女登牆闖臣三年、至今未許也。

⑤登徒子則不然。其妻蓬頭擘耳鬢歷齒、旁行踽偻、

又疥且痔。登徒子悅之使有五子。

⑥王孰察之。誰為好色者。

①は大夫の登徒子という男が、楚王に宋玉の短（善注「罪闕」）について訴えたのである。その内容は、宋玉は容姿が美しく言葉が巧みで、その上に好色であるので、王は彼と後宮に出入りしないようにというものである。②はそこで王が宋玉を呼び登徒子の訴えを確かめる。そこで宋玉は、容姿の美しいのは天が与えたもの、美辭麗句は先生から学んだもの、しかし、私を好色だというのは間違いであると答える。③はそれを聞いた王は、好色ではないことを証明することを求め、出来なければ王の前から去ることを命じる。④は宋玉が自分は好色ではないことを論じた内容である。それによれば、天下の美人は楚國にあり、楚國の美人は自分の村にあり、自分の村の美人は東隣の家の娘であること、この娘は背を一分増すと高すぎ、一分減らすと低すぎ、白粉を付けると白すぎ、朱を施すと赤すぎること、眉は翠の羽、肌は白雪、腰は白絹の束、齒は貝を含むよう、嫣然として微笑むと人々を魅惑すること、その娘は垣根に登って私を窺い見ること三年にもなること、しかし、今に至るまで自分は娘に気を許さないであることを説くのである。⑤はそれに対してむしろ登徒子の方が好色であることを論じたものである。宋玉によると、登徒子の妻

の頭はまるで蓬のように乱れ、耳はつぶれていて、唇からは歯が飛び出し、その歯も疎らで、よろよろ歩きの上に体は曲がり、皮膚病を患い痔にもかかわらず、それであるのに登徒子はその妻を可愛がり、おまけに五人の子供まで生ませている、と反撃するのである。⑥は従つて宋玉は、王に対して一体誰が好色であるのか、しつかりと見極めてほしいと述べる。

登徒子が宋玉を好色だとした理由は記されていないが、王に後宮に入れないように注意しているところから見れば、色好みだと判断されていたことは確かである。宋玉が「体貌閑麗」という美男子であつたと伝えるのは、田主と共通するし、また在原業平も「体貌閑麗」(『三代実録』元慶四年五月二十八日)と記録されるように、好色の系譜が存在する。後宮の女性たちも宋玉を見たり聞いたりして嘆息したということであるのだろう。後宮の女性たちは《みやび》の女たちであり、登徒子が宋玉を好色としたのは、このみやびとしての好色であつた筈である。しかし、宋玉の反撃は登徒子を好色の典型と決めつけるのであり、好色論争の果てのこの逆転の面白さがこの賦の重要な生命である。ところで、このように宋玉が登徒子を好色だと決めつけても、それを誰もが首肯したとは考えられないだろう。この論理は詭弁なのであり、好色はやはり宋玉なのである。

だから、これは好色論争なのであり、その論争を通して事実を逆転させる面白さが宋玉の狙いである。いわば、戯・滑稽である。むしろ、登徒子の妻は日常の真面目な生活者であり、登徒子もまた宋玉の好色を聞いて王に忠告する儒教風な真面目な大夫だといえる。その落差(宋玉の好色性と登徒子の儒教風な真面目さ)がこの賦の重要な逆転を生み出すことになるのである。

ここに、石川女郎と大伴田主との風流論争が理解されて来るであろう。女が男のもとへと通うのは異例であるが、ここには恋歌を構成する女による《恋の挑発》があり、それ自体が日常の逆転を示している。好色論争の面白さは価値の逆転にあるが、女郎が東隣の貧女だということも、明らかに東隣の美女の逆転である。田主は世間に評判の天下無双の美男子で、田主を見た女たちを「恋死」させるほどの好色であるにも拘わらず、女郎の挑発を無視したのは宋玉のように逆転の論理を用いたためであるといえる。その上で女郎は田主の遊士を「於曾の風流士」だといひ、田主は自分こそ本当の「風流士」だという。この好色論争から考えるならば、石川女郎の求めている風流は、おそらく《今風》な風流であり、今風な風流の士である筈の大伴田主の示した風流は、おそらく《古風》な風流である。田主のそれは古風を装つたものに外ならないのであるが、その落差

の中にこそ風流の文化的価値の相違が現れているのだと考えられる。二人はこの異なる風流の人を演じているのである。この風流における今風と古風が、当時すでに新たな価値として現れていたことを示唆しているのである。

三 古風と風流

武智麿伝によれば、神亀五年七月の武智麿の播磨守遷任の記録に続いて、風流侍従などに関する次のような事が見える。

①風流侍従有六人部王。長田王。門部王。狹井王。桜井王。石川朝臣君子。阿倍朝臣安麻呂。置始工等十余人。

②宿儒有守部連大隅。越智直広江。肖(背)奈行文。

箭集宿禰虫麻呂。塩屋連吉麻呂。檜原東人等。

③文雅有紀朝臣清人。山田史御方。葛井連広成。高丘連河内。百濟公倭麻呂。大倭忌寸小東人等。

④方士有吉田連宜。御立連呉明。城上連直立。張福士等。

⑤陰陽有津守連通余。直人王仲文。津連首谷。卍康受等。

⑥曆平有山口忌寸田主。志紀連大道。私石村。志斐連三田次等。

⑦呪禁有余仁軍。韓国連広足等。

⑧僧綱有少僧都神叡。律師道茲。

⑨竝順天休命。共補時政。由是國家殷賑。倉庫盈溢。

天下太平。街衢之上。朱紫輝々奕々。鞍乗駱々粉々。

囿園幽寂。嘉石苔生。

ここに見える「風流侍従」は、当代のすぐれた学者である「宿儒」、同じくすぐれた文章家で風流を弁えた者である「文雅」、道教の道士で方術の専門家である「方士」、陰陽師で吉凶禍福を祈る呪術の専門家である「陰陽」、天文曆法の専門家である「曆平」、呪術の技術者である「呪禁」、僧官の長である僧都や律師などの「僧綱」と並ぶものであり、これらはいずれも外来の特殊な文化や知識あるいは技術の能力を身につけた者であることが知られる。それゆえ、風流侍従もまた、このような外来の特殊な能力の中に存在したものであり、外来の文化の総合化の中で新しい時代を迎えた状況を語るものとして登場するのである。これらの特殊能力者は当代の政治を補佐する者たちであり、そのことによって国家は賑わい倉庫には穀物が満ち溢れ、天下太平の世となるというのである。

この風流侍従の個々人の経歴や家系について詳しく検討された村山出氏は、聖武朝の歌舞が礼楽の思想によることを確認した上で、この風流侍従は典故・儀制・格式などに

明るく、古歌舞・音曲にも通じた「風流有る者」であつたと指摘する¹²。また、井村哲夫氏は村山氏の論を受けて彼らが礼の人・楽の人であり、常侍規諫捨遺補闕の職掌柄、聖武天皇の身辺を礼で飾り楽で調和えた侍従たち、即ち「風流侍従」と呼ばれた者であつたことを追認する¹³。この村山・井村両氏の論は風流侍従に関して周到なものであり、殊に両氏が彼らを礼楽の人であるとするのは、風流侍従の本質を指摘するものであつたといえる。

そうした礼楽の人である風流侍従らとともに文雅があり、その中の文雅の人に『懷風藻』の詩人でもある葛井連広成がいる。その広成の邸宅で天平八年十二月十二日に宴会が開かれた。そこには歌儺所の諸王臣子たちが集つたといふ。

冬十二月十二日、歌儺所之諸王臣子等、集葛井連

広成家宴歌二首

比来古儺盛興、古歳漸晚。理宜共尽古情、同唱古歌。
故、擬此趣、輒献古曲二節。風流意氣之士、儻有此
集之中、争発念心々和古体。

我屋戸之 梅咲有跡 告遣者 来云似有 散去十方吉

(卷六・一〇一一)

春去者 乎呼理亦乎呼里 鶯之 鳴吾嶋曾 不息通為
(同・一〇一二)

広成の家に集つた「歌儺所」の諸王・臣子は、一般に治

部省所屬の雅楽寮のもの¹⁴とされる。雅楽寮には頭の他に助・大允・少允・大属・少属・歌師・歌人・歌女・儺師・儺生・笛師・笛生・笛工・唐楽師・同楽生・高麗楽師・同楽生・百濟楽師・同楽生・新羅楽新・同楽生・技楽・腰鼓師の者が置かれており、頭は「掌文武雅曲正儺。雜樂。男女楽人音声人名帳。試練曲課事」とあり、雅曲・正儺は唐楽などの外来楽を指し、雜樂は我が国在来の舞楽を指すものと考えられている¹⁵が、天平三年七月二十九日に雅楽寮の雜樂の定員を定めて、「大唐樂卅九人、百濟樂廿六人、高麗樂八人、新羅樂四人、渡羅樂六十二人、諸皇舞八人、筑紫舞廿人¹⁷」とあり、雜樂は外来楽にも日本在来の楽にも存在したのである。ただ、歌儺所が治部省所屬か皇后宮直屬かの問題はあがあるが、葛井広成の家に集つた諸王・臣子たちは歌儺所に所屬する歌舞の名手たちであつた。彼らは日本在来の歌舞についても身につけていたが、何よりも彼らの本領を發揮したのは、明らかに外来楽であつた筈である。

ところで、先の風流侍従として登場する者の中で、長田王と門部王は天平六年二月朱雀門の歌垣に頭として登場する。その記録によると、

天皇御朱雀門覽歌垣。男女二百四十余人。五品已上有
風流者皆交雜其中。正四位下長田王、從四位下栗栖王、

門部王、從五位下野中王等為頭。以本末唱和。為難波曲、倭部曲、淺茅原曲、広瀬曲、八裳刺曲之音。令都中士女縱觀。極飲而罷。〔続日本紀〕聖武紀)

と見え、諸王五品以上の「風流ある者」がそこに交じったという。すでに長田王・栗栖王・門部王・野中王は風流の者として認定されていたことが窺われるのであり、彼らが「歌舞所」の創設の中心的役割を果たしたものであろう。

その役割については池田三枝子氏が長田王について、彼の役割が「礼楽思想に基づく歌舞整備の動向の中で、地方歌舞を宮廷芸能の秩序内に取り込むこと」であった、と指摘する¹⁸⁾。広成の邸宅での宴集は、この歌垣の二年後のことである。したがって、天平八年の広成邸宅の宴集は、おそらく歌舞所が創設されて間もない時期に、文雅の人広成のもとに風流人士が集まって開かれた、最も《時流》を現した宴集であつたに違いないのである。

この宴集の序文によると、当時、世間では古儻が流行していたという。天平六年の歌垣もその曲名から古曲に基づく古舞であり、歌垣という新たな外来の楽舞が興り、新たに日本古来の楽舞がそこに組み込まれたのである。それが伝統として継承されて、宝龜元年三月の歌垣では次ぎのよな盛儀であつた。

葛井・船・津・文・武生・葺六氏男女二百卅人供奉歌

垣。其服並著青摺細布衣。垂紅長紐。男女相並、分行徐進。歌曰、

乎止壳良尔。乎止古多智蘇比。布美奈良須。尔詩乃美夜古波。与呂豆与乃美夜。

其歌垣歌曰、

布知毛世毛。技与久佐夜氣志。波可多我波。知止世乎麻知弓。須壳流可波可母。

每歌曲折、拳袂為節。其余四首、並是古詩。不復煩載。詔五位已上内舍人及女孺、亦列其歌垣中。〔続日本紀〕称徳紀)

この六氏はいずれも渡来系人で、その中に葛井氏が含まれているのであり、¹⁹⁾広成の文雅の土壌はこのようなところにある。風流を尽くした歌垣が、外来の楽舞を倭化し渡来人によつて隆盛したことが理解できる。何よりも、歌垣の歌が「古詩」だというのは、広成の家の宴集の趣旨と等しいことに注目されるであろう。古儻が流行しているというのは、「古」に特別な価値を見出す風潮が存在したということであるが、この時代にはすでに『古事記』や『日本書紀』の成立もあり、政治的には、史書がしばしば中国の堯・舜などの故事や古典籍を引いて帝王の道を示し、あるいは聖武天皇が、

古先哲王、君臨寰宇、順兩儀以亭毒、叶四序而齊成。

陰陽和而風雨節、災害除以休徵臻。故能騰茂飛英。

〔続日本紀〕神龜二年九月

というように、天皇自らの薄い徳を嘆き「古先哲王」の優れた政治を回顧する中にも、「古」への尊重が見られるのであり、古風回顧の時代へと向かっていたと思われる。この古風回顧が広成の家の宴集において主題化されたのである。そこには、

古儻 古歳 古情 古歌 古曲 古体

の「古」が羅列され、この中に「風流意氣之士」があれば念を発し心々に古体に和せというのである。この古風こそ《風流》のもっとも心意気を示すものであり、それは風流士たちのみの実現できる雅であつたということになる。

それでは、この古風に基づく風流とはどのようなものであつたのか。古情を示す古歌と古曲として挙げられたのが二首の歌である。その一首目は、「我が家の庭に梅が咲きましたと人に知らせると、恰もいらつしやいというふうなものだから、いつそのこと散つてもかまわない」というのである。梅の咲いた喜びを誰かに知らせたいのだが、それは却って煩わしいこととなるのである。この類似した歌は『古今集』（巻十四）にも「月夜よし夜よしと人につげやらばこてふににたり待たずしもあらず」と詠まれていて、これも古風に詠まれた歌なのであろう。二首目は、「春が

やって来たので枝を撓めて鶯が鳴く私の庭です。いつでも通つて来てください」というのである。一首目は「梅」で二首目は「鶯」である。いわば梅と鶯の花鳥歌であり、それに恋を含ませているのである。この形が古情を導く古歌・古曲・古体なのだというのだが、土屋文明氏は「古体といふよりは、詞の綾を主とする此の時代の新しい風」

（筑摩書房版『万葉集私注 三』）だといふように、それほど古風を感じさせないものといえる。それゆえ、古曲と称する所以は曲の方にあり、歌風にそれは見られない（土屋氏前掲書）ということかも知れない。だが、それならば彼らが「古」を尽くした理由は見出されないものであり、これはすでに古歌・古曲であつたと考えるべきであらう。

梅の花の歌といえば、直ちに想起されるのは大伴旅人が大宰府にあつて開いた「梅花の宴」であらう。和歌が「梅花」を詠題として詠んだ最も早期のものであり、かつ、それは天平初期を象徴する盛大な宴集であつた。大宰府諸国の官人三十二人が集い梅花を詠むという、いわば笛・詩・酒の風流が極められたのである。その序文には、

初春令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。

加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、鳥封穀而迷林。庭舞新蝶空帰故鴈。

のような美文が記され、詩に「落梅之篇」があり、古今交

わるところが無いのだから、園の梅を賦して「短詠」を成そうというのであり、これがこの宴集の趣旨であった。その上で梅の花への思慕と鶯の声への賞美を尽くすのであり、それは大宰府に開かれた新風の《風流》であったのである。これらの中に、先の二首に直接流れる語句の上での類似歌は無いが、しかし、

波流奈例婆 字倍母佐枳多流 烏梅能波奈 岐美乎於

母布得 用伊母祢奈久尔 (卷五・八三一)

和我夜度能 烏梅能之豆延尔 阿蘇毗都々 宇具比須

奈久毛 知良麻久乎之美 (同・八四二)

は、春に至り梅の花が咲いて君(梅の花)のことを思うと夜も寝られないのだといい、また、庭の梅の下枝に遊びながら鶯が鳴いていて、梅の花が散るのが惜しいという。梅への思慕が夜も寝られない状態を作るのだが、それは一人で愛でいたい梅だが、あまりにも美しく他人に教えてやりたい感情を押さえ切れないのである。それが業平のような「たえて桜のなかりせば」という感情を生み出すこととなる。あるいは、梅の下枝を飛び交う鶯への賞美も容易に発想されているものではない。この梅花の宴集が中国楽府「梅花落」を背景としていることは明らかであり、多くの歌が共通して詠む「梅の花落る」という言葉は、おそらく「梅花落」の和語化・翻訳化であり、その楽府詩梅花落は

故郷を離れている辺境の軍士たちが梅の花の咲いたのを見て故郷を思う歌であり、それは横吹曲として横笛に合わせ歌われたのである。おそらく、大宰府の梅花の歌も懐かしいのを思いつつ梅花落に擬らえて歌われたものと思われる。都の風流を懐かしむのがこの梅花の宴であったことは、続く旅人の作と思われる「員外」の故郷を思う歌からも知られるが、更に「後追和梅歌四首」に見える「梅の花夢に語らく風流びたる」「美也備多流」花と我思ふ酒に浮かべこそ(卷五・八五二)により鮮明に現れている。梅花と酒とみやび(歌・楽)とがこの宴の風流であった。そのことから考えるならば、広成の家の宴集における古風への嗜好は、この大宰府の梅花の宴の風流をそれとしながら、更には楽府の「梅花落」へと向けられていたようにも思われる。しかも、それが横笛の曲によるものであり、古曲はこのことを指していると考えられる。

古風への関心がこの時代の風流であったのは、風流が先の「大漢和辞典」の①に「なごり。遺風。余流。遺沢。美風のなごり。流風余韻」とあったように、美風のなごりとして考えられたからであろう。当時の政治が古の聖人を尊重し儒教政治を執り行うことと並んで、文化は古風尊重へと向かっていった。古の美風のなごりとして、広成たち風流の士は大宰府梅花の宴を尊重すべき風流の源流と考え、そ

の遺風を受けて古情を尽くすのであり、風流意気の士たちは競つて古歌を古曲に合わせて歌い、古体に答えたものと思われる。まさに、古風が風流であつたのである。

四 おわりに

ここに万葉集に現れる二つの「風流」について概観したが、そこには《今風》と《古風》との価値の位相が現れていることが理解される。東隣の貧女に扮した石川女郎の風流は《今風》の風流であり、女郎から「於曾」と非難された大伴田主の風流は《古風》を装つたものである。それらにある特別なモデル（風流名士）が存在したと考えられるが、ここには六朝後期から唐代に至る神仙の好色が風流として受け入れられることによつて、一方に古風を尊重する態度が現れたのである。女郎の指し示した今風の風流とは、まさに「遊仙窟」に見るような「勒腰須巧快、捺脚更風流」という桃源境における男女の交接の方法や恋愛表現を含むことによつて成立する六朝末から唐代の「好色風流」であつた。そして、田主の装つた古風な風流は美風のなごりにあり、それは儒教的な先哲の教えを尊重する風流であり、あるいは隠逸者の風流である。そこには価値を逆転させながらも、当時の風流のありようを見事に演じた二人の風流論争があつたといえる。また、葛井広成の邸宅で

行われた宴集における古情を尽くした風流は、まさに旅人たち風流名士が集い大宰府で風流を尽くした「梅花風流」にあり、その梅花風流の遺風を尊重することを趣旨とするものであり、その意味では田主の装う風流と等しいものであつたのである。

古風の尊重という風潮は、当然のことながら今風への批判が隠されているのであり、『続日本紀』慶雲三年三月十四日の詔には、

夫礼者天地經義人倫鎔範也。道德仁義因礼乃弘。教訓正俗待礼而成。比者諸司容儀多違礼儀。加以男女无別、昼夜相会。

と見えるように、礼は天地の經義・人倫の鎔範とし、道德・仁義は礼によつて広まること、教訓・正俗も礼を以て成るのだという、伝統的な思潮を繰り返す。しかし、ここに問題となるのは、近ごろ官人たちの容儀が礼儀に違反し、また、男女別なく昼夜相会するということである。「容儀」は姿形であり立ち居振る舞いである。それが礼儀に違反しているというのは、おそらく外来の「時装」の流行を示唆するものであり、男女が昼夜別なく相会するというのは、男女の遊びや恋愛が公の場で行われていることを示唆するのである。まさに「礼」という儒教的な《古風》と、「男女」という風俗的な《今風》との価値の差異が現れていた

のである。

注

- (1) 本文は、中西進氏『校訂 万葉集』（角川書店）による。なお、旧漢字は新漢字にし、返り点は省略した。以下同じ。
- (2) 深津胤房氏「古代中国人の思想と生活」『二松学舎大
学東洋学研究所集刊』第二十二集
- (3) 小西甚一氏「風流とみやび——琴・詩・酒・妓の世界
——」『解釈と鑑賞』27巻14号
- (4) 『群書類従』巻第百八十二
- (5) たとえば、川上富吉氏「石川女郎伝承像」『万葉歌人
の研究』参照。
- (6) 「万葉集と中国文学との交流」『万葉集と中国文学
中』
- (7) 「石川女郎・大伴田主贈報歌」『万葉集を学ぶ』第二集
- (8) 「万葉の『風流土』——石川女郎・大伴田主の贈答歌
をめぐって——」『相模国文』第二十号参照
- (9) 本文は、中文出版社本『文選』による。
- (10) 辰巳「額田王——挑発の恋歌——」『万葉集と中国文
学 第二』参照
- (11) 本文は、『群書類従』（第五輯）巻第六十四による。
- (12) 「風流侍従の論」『奈良朝万葉歌人の研究』なお、同
書には他にも「風流侍従」に関するすぐれた論があり参
考となる。

- (13) 「天平宮廷歌壇と歌儺所 覚書」『森淳司博士古希記
念論集 万葉の課題』所収
- (14) なお、歌儺所を雅楽寮所属とすることの疑問が日本古
典文学大系『万葉集』以来提起されている。特に桜井満
氏はこれが令外の機構であり、内廷に直属するものとな
る（宮廷伶人の系譜）『柿本人麻呂論』。
- (15) 本文は、増補国史大系『令義解』による。
- (16) 桜井満氏注12参照
- (17) 本文は、増補国史大系『続日本紀』による。以下同じ。
- (18) 「風流侍従長田王考」『上代文学』第六十九号
- (19) 「歌垣」は日本の中にも行われていた習俗であるが、
折口信夫氏はこの歌垣は踏歌を旧来の歌垣と称した
（和歌の発生と諸芸術との関係）『折口信夫全集』第十
七巻）とし、以後、外来の「踏歌」と習合して宮廷的に
形成されたものであるとするのが今日の通説である。詳
しくは、宮岡薫氏『続日本紀』歌垣歌謡の表現」（『古
代歌謡の展開』）参照。
- (20) 『新撰姓氏録』の葛井宿禰条に「菅原朝臣同祖。塩君
男味散君之後也」とあり、菅原朝臣は「出自百濟国都慕
王十世孫貴首王也」と見える。なお、葛井広成はもと
「白猪史広成」であるが、養老四年五月ころに葛井連賜
姓があった。白猪氏は百濟出自である。
- (21) 辰巳「落梅の篇——楽府「梅花落」と大宰府梅花の宴
——」『万葉集と中国文学』参照
- (22) 岡崎義恵氏「風流の思想」『日本芸術思潮』参照

(23)

本文は、八木沢元氏『遊仙窟全講』による。他にも風流は「双鷄子、可々事風流」「自隠風流到、人前法用多」のように現れるのを特徴としている。